様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　13 日現在

機関番号：８０１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2012
課題番号：２１７２０２９０
研究課題名（和文）　日本列島北部における古代交易ルートの基礎研究

研究課題名（英文）　Basic Research into Ancient Trade Routes in the Northern Region of the Japanese Archipelago

研究代表者
鈴木　琢也（SUZUKI　TAKUYA）
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：４０３４２７２９

研究成果の概要（和文）：本研究では、古代の日本列島北部地域を対象に、考古学的アプローチにより地域間の遺物の共通性、非共通性を明らかにした。また、文献史学的アプローチにより文献史料、木簡、土器にみられる交易関連の記述を集成した。さらに、この考古学的、文献史学的アプローチの比較研究により、北海道から東北地方、本州中央部の「都」へといたる古代交易ルートの実像を明確にした。

研究成果の概要（英文）：This study used an archeological approach to shed light on the common and non-common artifacts found among ancient communities in the northern region of the Japanese Archipelago. Using a literary analysis approach, this study also integrated trade-related mentions from historical documents, wooden strip recordings, and earthenware. Furthermore, a comparative studying using both the archeological approach and literary analysis approach was used to clarify actual ancient trade routes spanning from Hokkaodo to the Tohoku region and the capital area of Central Honshu.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、考古学
キーワード：歴史考古学、古代北方交易、擦文文化、平安時代、擦文土器、須恵器、鉄製品

１．研究開始当初の背景

古代の北海道と東北地方の交易の研究は、北方文化、あるいは北方史研究で考古学と文献史学が学際的に研究を進める課題として注目されてきた。研究代表者も早くからこの研究に着手し、平成 15～20 年度にかけて科学研究費の若手研究(B)を受け、10 世紀以降、擦文文化と本州文化の物流･交易が隆盛することを明確にし、擦文文化集団が本州への交易品である毛皮類、鷲羽などの獲得を目的に北海道全域へ拡散、定住していくことを明らかにした。

この研究を進める中、擦文文化が拡散した結果、地域的なまとまりをもつ拠点的な交易圏が北海道内の七つの地域に成立していたことを確認した。しかも、これらの交易圏と東北地方北部の五つの地域が積極的に物流･交易を活発化させた状況がうかがわれた。す

なわち、この擦文文化の七つの地域の交易圏と東北地方北部の五つの地域を結ぶ交易ルートを明確にすることが新たな課題として提起されてきた。さらに、津軽海峡周辺地域に古代国家に関連する遺跡が検出され、北海道から東北地方を経由し古代国家へとつながる交易ルートの解明が可能となった。

これらの研究背景から北海道と東北地方、古代国家へとつながる海上交通・内陸交通、さらには交易システム、物流経済の構造を解明するため本研究を実施するに至った。

２．研究の目的

古代における北海道から東北地方、さらには本州中央部の「都」へといたる交易ルートの実像を「考古学的アプローチ」はもとより、「文献史学的アプローチ」との比較検討により具体的に明確にし、日本列島北部における北方社会の状況や地域間交流のありかた、さらには古代国家と北方地域との関係など交易システムや物流経済の構造を明らかにするものである。

３．研究の方法

本研究の方法は、日本列島北部における古代交易ルートの解明を目的に、「考古学的アプローチ」による地域間の遺物の共通性、非共通性の検討と、「文献史学的アプローチ」による文献史料、木簡、墨書・刻書土器にみられる交易に関連する記述の検討との比較研究を中心に実施するものである。

(1)考古学的アプローチによる研究

①北海道内の交易ルート

北海道における地域間の擦文土器の共通性、非共通性、時期差を検討し擦文文化の拠点的な交易圏間の交易ルートを明確にする。

②北海道と東北地方の交易ルート

津軽海峡をはさんだ北海道と東北地方の擦文土器、あるいは土師器の共通性、非共通性、時期差などを検討する。さらに、擦文文化の交易圏に流入した鉄製品、須恵器、青銅製品などの生産地や供給地、流通経路を比較検討し、北海道と東北地方の交易ルートを解明する。

③東北地方と古代国家の交易ルート

東北地方にみられる律令祭祀具、仏教関連遺物、檜扇など古代国家に関連づけられる遺物や遺跡から古代国家側の交易システムを検討する。

(2)文献史学的アプローチによる研究

①文献史料に示される地域名、交易品目、交易方法に関連する記述を集成し、史料からみた交易システムを検討する。

②木簡、墨書・刻書土器などの文字資料に示される地域名、交易品目に関連する記述から交易ルートを検討する。

４．研究成果

本研究の成果は、次に示すとおりである。(1)～(3)は主として考古学的アプローチによる研究成果であり、(4)は主として文献史学的アプローチによる研究成果である。(5)は研究成果のまとめ、(6)は研究成果の位置づけ、(7)は展望を示したものである。

(1) 擦文土器からみた交流・交易のルート

擦文文化期の竪穴住居址から出土する擦文土器と須恵器の供伴関係やその地域的な分布と、東北地方北部から出土する擦文土器の分布から8～11世紀における北海道と東北地方北部の文化的な交流の状況を示し、交流や交易のルートについて考察した。その結果、次のことが明らかになった(成果図書①・②)。

①擦文土器の分類とその年代(図1)

擦文文化期の竪穴住居址床面から出土した擦文土器と須恵器の供伴関係や、擦文土器の特性の検討をもとに、8～11 世紀における擦文土器の分類とその年代を示した。これは、図1にその概要を示した。

また、これらの分類した土器のほかに五所川原産須恵器との明確な供伴例がみられない「貼付囲繞帯を施した擦文土器」と「北海道南西部の土器」がある。「貼付囲繞帯を施した擦文土器」は、10 世紀末以降の年代の土器であり、「北海道南西部の土器」は、10 世紀末以降の年代の土器である。

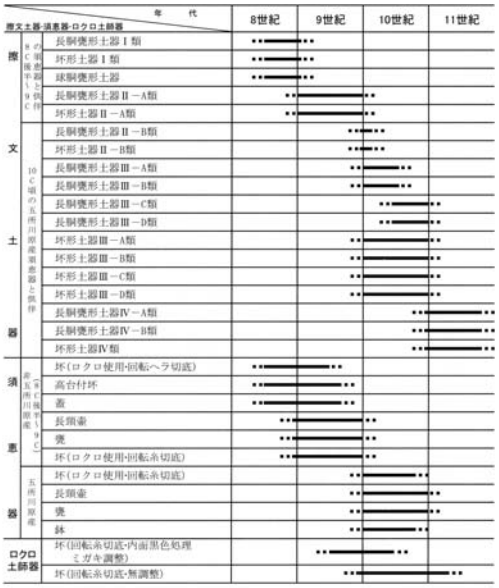

図1　北海道における擦文土器・須恵器の供伴関係と年代

②擦文土器からみた交流・交易のルート

先に示した擦文土器の分類と年代をもとに、北海道と東北地方北部における擦文土器の地域的な分布を検討し、これらの地域間の文化的な交流の状況、あるいは交流や交易のルートについて考察した。

8 世紀後半～9 世紀は、長胴甕形土器Ⅰ類、坏形土器Ⅰ類、球胴甕形土器、長胴甕形土器Ⅱ―A類、坏形土器Ⅱ―A類と秋田県域で生産されたと考えられる須恵器が供伴する。この供伴関係と、これらの擦文土器の分布状況から、石狩低地帯と秋田県域(出羽国)を主体とする地域との間の交流や交易が展開していた状況がみられ、その交流や交易のルートは「日本海ルート」が主要であった。

10 世紀頃は、長胴甕形土器Ⅱ―B類、坏形土器Ⅱ―B類、長胴甕形土器Ⅲ―A類、同Ⅲ―B類、同Ⅲ―C類、同Ⅲ―D類、坏形土器Ⅲ―A類、同Ⅲ―B類、同Ⅲ―C類、同Ⅲ―D類と青森県五所川原産須恵器が供伴する。この供伴関係と、これらの擦文土器の地域的な分布から、日本海沿岸の北海道北西部・西部、石狩低地帯の河川河口域と、青森県津軽地方・青森県日本海沿岸の河川河口域を主体とする地域の間で交流や交易が展開していた状況が考えられ、その交流や交易のルートは「日本海ルート」が依然として主要であった。しかしながら、これらの擦文土器の分布は、太平洋沿岸の北海道南部・東部の河川河口域と、青森県外浜・下北半島北部沿岸の河川河口域にもわずかにみられることから「太平洋ルート」による交流や交易も開始されたと考えられる。

10 世紀末以降は、長胴甕形土器Ⅳ―A類、長胴甕形土器Ⅳ―B類、坏形土器Ⅳ類、「貼付囲繞帯を施した擦文土器」、「北海道南西部の土器」の地域的な分布から、日本海沿岸の北海道北西部・西部・南西部、石狩低地帯、オホーツク海沿岸の北海道北東部の河川河口域と、青森県津軽地方・青森県日本海沿岸の河川河口域を主体とする地域の間で「日本海ルート」による交流・交易が展開していた。また、太平洋沿岸の北海道南部・東部の河川河口域と、青森県外浜・下北半島北部～南部沿岸の河川河口域を主体とする地域の間で「太平洋ルート」による交流・交易が展開し、「日本海ルート」と「太平洋ルート」による二つの交流や交易のルートが成立していたと考えられる。

さらに、10 世紀後半以降の土器である長胴甕形土器Ⅲ―C類、同Ⅳ―A類、同Ⅳ―B類、坏形土器Ⅳ類は、サハリン南部や千島列島の国後島・択捉島からも出土している。北海道と東北地方北部の交易が活発化する中、擦文文化の分布がこれらの地域にまで拡がるものと考えられる(成果論文②・④・⑤)。

(2) 本州から北海道への物流と交易ルート

本州から北海道に搬入された鉄製品、須恵器、銅鋺の物流の状況を示し、10～12 世紀の北海道における物流・交易の地域的な拡がりと、交易ルートについて検討した結果、次のことが明らかになった(成果図書①・②)。

①北海道における鉄製品の交易ルート(図 2)

8～9 世紀の鉄製品の分布は、石狩低地帯の石狩川水系河川河口域や下流域に集中し、種類も刀子、斧、鋤・鍬、鎌、釘、紡錘車など実用的な生活用具類のほか、武具類などが流入している。この時期には、本州産蕨手刀の分布が石狩低地帯の擦文文化の遺跡と、オホーツク海沿岸域のオホーツク文化の遺跡にみられる。

10 世紀になると、分布は前代からの地域に加え、日本海沿岸の北海道南西部・西部・北西部、オホーツク海沿岸の北海道北東部の河川河口域、北海道中央部の石狩川水系中流域にに拡がる。その種類も、前代からの品に加えて、新たに錐や針などの生活用具類が入ってくるなど多様化する。

11～12 世紀には、北海道のホーツク海沿岸

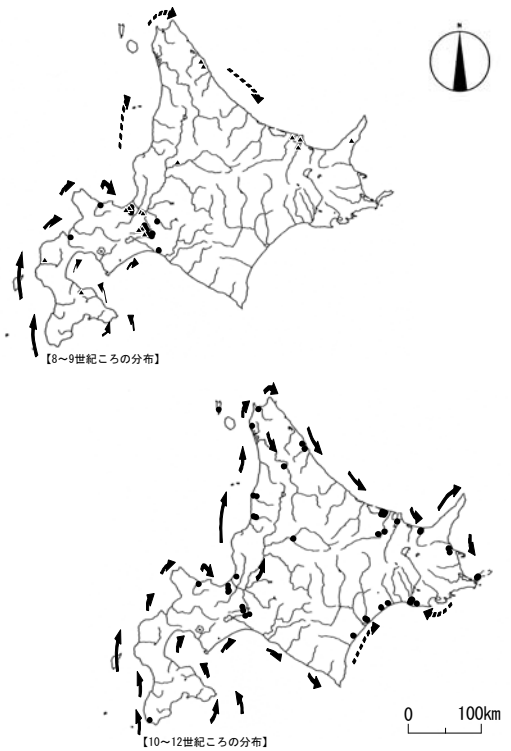

図 2　鉄製品の時空分布と交易ルート

域一帯や、太平洋沿岸の北海道南部・東部の河川河口域・下流域にさらに分布が拡がり、種類も、鉄製釣針や鈎状鉄製品などの鉄製漁労具類がみられるようになる。

このことは、10～12 世紀に鉄製品の物流・交易が活発化したことを示すものである。さらに、11 世紀以降には、太平洋沿岸の北海道南部・東部の河川河口域・下流域に鉄製品の分布が多くみられ、「日本海ルート」に加え、「太平洋ルート」による交易ルートが成立したことを指摘できる。

②北海道における須恵器の交易ルート(図 3)

8～9 世紀の須恵器の分布は、石狩低地帯と日本海沿岸の北海道西部の河川河口域・下流域に集中する。その器種は、坏、蓋、長頸壷、中甕であり、竪穴住居跡床面から出土した須恵器の器種別出土数の割合をみると、坏 68%、蓋 10%、長頸壷 3%、中甕 19%で、坏の出土数が半数以上を占めている。

五所川原産須恵器の流入する 10 世紀になると、分布域は前代からの地域に加えて、日本海沿岸の北海道南西部・北西部、オホーツク海沿岸の北海道北東部、太平洋沿岸の北海道南部・東部の河川河口域、さらに北海道中央部の石狩川水系中流域(盆地)など、北海道全域に拡がる。また器種別割合をみると、坏 13%、蓋 0%、長頸壷 50%、中甕 37%と大きく変化し、長頸壷と中甕が大部分を占めるようになる。

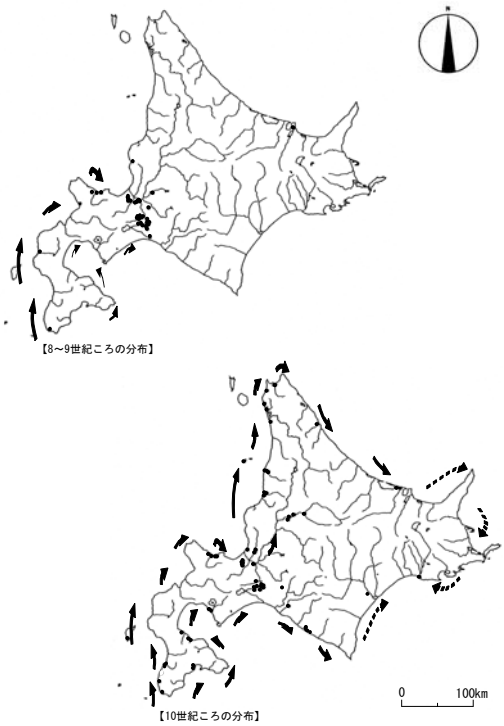

図 3　須恵器の時空分布と交易ルート

以上のことから、須恵器の場合も、10 世紀を画期とする物流の活発化を指摘できる。さらに、10 世紀以降、須恵器の分布は日本海沿岸の北海道北西部とオホーツク海沿岸の北海道北東部の河川河口域に加え、太平洋沿岸の北海道南部・東部の河川河口域にみられ、「日本海ルート」はもとより「太平洋ルート」による物流が活発化しはじめたのである。

③北海道における銅鋺の交易ルート(図 4)

北海道から出土する本州産の銅鋺は、太平洋沿岸の北海道南部・東部、石狩低地帯の河川河口域を中心に分布している。北海道の日本海沿岸域では、銅鋺の分布がみられない。これらの銅鋺は、擦文土器との供伴関係などから 10～12 世紀の年代が考えられる。また、東北地方北部から出土する銅鋺の分布は、9 世紀後半～12 世紀に東北地方北部の青森県外浜の河川河口域、青森県津軽地方の岩木川水系河川河口域、青森県東部の馬渕川水系河川河口域、岩手県の北上川水系河川中流域にみられる。

このことは、10～12 世紀に太平洋沿岸の北海道南部・東部の河川河口域と、青森県外浜・津軽地方の河川河口域を主体とする地域の間で「太平洋ルート」による物流・交易が活発化したことを示すものと考えられる。

(3) 交易ルートの展開

擦文土器の地域的な分布や特性、本州から北海道に搬入された鉄製品や須恵器、銅鋺の物流を検討し、8～12 世紀の北海道と東北地方の物流の様相やそのルートについて示してきた。これらの検討から、10 世紀ころを画期として北海道と東北地方の物流が広範に展開していく状況が明らかになった(成果論文⑦、成果図書①・②)。

8 世紀後半～9 世紀は、先に示した鉄製品や須恵器の分布が石狩低地帯を中心に集中

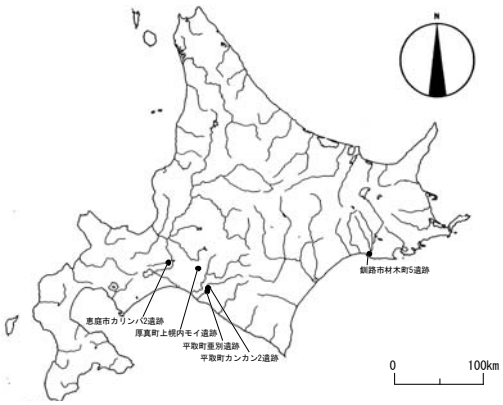

図 4　銅鋺の分布と交易ルート

する一方、本州との中間に位置する北海道南西部(渡島半島)での出土が希薄なことから、海路を利用し、石狩川水系の河口域・下流域に交易品が搬入されたことが想定される。その場合、北海道で出土する須恵器が秋田県域の窯で生産されたと考えられることから、主として石狩低地帯と秋田県域(出羽国)を主体とする地域の間の物流・交易が展開していたと考えられる。また、この時期は、蕨手刀の分布などから石狩低地帯の擦文文化集団が、本州とオホーツク文化集団の交易に関わっていたと考えられる。

10～12 世紀はオホーツク文化が終焉を迎え、擦文文化が石狩低地帯から新たに日本海沿岸域の北海道北西部～オホーツク海沿岸域、太平洋沿岸域の北海道南部～東部にまで拡大する。これらの遺跡からは本州産の鉄製品や須恵器、銅鋺などが確認される。さらに、北海道出土の須恵器が青森県五所川原産須恵器にかわり、この時期、青森県の岩木川水系下流域・日本海沿岸の河口域と、外浜・陸奥湾周辺地域を中心に特性の異なる擦文土器の分布が確認される。

したがって、北海道の日本海沿岸～オホーツク海沿岸、石狩低地帯の河口域と、青森県岩木川水系下流域・日本海沿岸の河口域を主体とする地域の間で「日本海ルート」による物流・交易が展開していたと考えられる。さらに、銅鋺が北海道の太平洋沿岸域のみにみられ、鉄製品や五所川原産須恵器も太平洋沿岸域に流入していることから、北海道太平洋沿岸の河口域と、青森県外浜・陸奥湾周辺地域との間で「太平洋ルート」による物流・交易が展開していくことがうかがわれる。

(4) 物流・交易の背景

「文献史学的アプローチ」により交易に関連する記述などを検討した結果、次のことが明らかになった(成果論文⑦、成果図書①)。

11 世紀以降、北海道産の毛皮類や鷲羽などが東北地方の有力な在地勢力である清原氏から陸奥守・鎮守府将軍、あるいは陸奥守・鎮守府将軍から「都」の有力貴族への献上品となっており、東北地方から「都」の有力貴族(中央政府)への交易品の物流の状況が示されている。たとえば、『御堂関白記』(長和元年閏十月廿一日条)や『小右記』(長和三年二月七日条)には、鎮守府将軍藤原兼光や平維良から藤原道長への献上品として鷲羽がみえるなど、11 世紀以降、東北地方に派遣された陸奥・出羽守や鎮守府将軍などの軍事貴族がこれらの交易品を都の有力貴族(中央政府)への献上品としていたことがうかがわれる。また、『奥州後三年記』上には、陸奥守である源義家(軍事貴族)を清原真衡が饗応し、北海道の産物と考えられるあざらし(毛皮)や鷲羽を献上した記録がみられる。

このことから 11 世紀には、北海道から東北地方北部に搬入された毛皮類、鷲羽などの北日本の特産物が、安倍氏・清原氏、さらには軍事貴族を経由し、都の有力貴族(中央政府)へもたらされていたことが指摘できる。軍事貴族や安倍氏・清原氏は、この物流・交易を担い勢力を拡大していくのである。

12 世紀は、安倍氏・清原氏勢力の系譜を受け継ぐ奥州平泉藤原氏が北海道産の毛皮類や鷲羽などを「都」の中央政府への交易品・献上品としていたことがうかがわれる。例えば、平泉藤原氏初代の清衡は、『中尊寺供養願文』において、「出羽陸奥之土俗」だけではなく、「粛慎悒婁之海蛮」(北海道などの北方の人びと)までが自分になびき従い、三十餘年の間、「羽毛歯革之贄」をとどこおりなく都に送ることができたと記している。また、平泉藤原氏は、東北地方南部にあった摂関家荘園を管理し、年貢をまとめて都に送る役目を担っており、そのなかで大曾祢庄や遊佐庄の年貢の品目に北海道の特産物であるアザラシの毛皮、鷲羽などがみられる。

このことから、12 世紀には、北海道から東北地方北部に搬入された毛皮類、鷲羽などの北日本の特産物が、奥州藤原氏を経由し、都の有力貴族(中央政府)へもたらされていたことが示唆されるのである。

(5) 研究成果のまとめ

「考古学的アプローチ」による交易ルートの実態と、「文献史学的アプローチ」による交易に関連する記述などを比較検討した結果、次のことが明らかになった。

11～12 世紀における北海道と東北地方北部の物流・交易隆盛の背景には、擦文文化集団との交易を進め、「富」を蓄積して勢力を拡大する安倍氏・清原氏・奥州藤原氏や軍事貴族、あるいは東北地方北部の有力な在地集団の関与がうかがわれる。一方、擦文文化集団は、本州への交易資源となる毛皮類や鷲羽などの獲得を目的として北海道全域へ拡散し、これらの交易資源を東北地方を経由し「都」に提供するとともに、本州産の鉄製品などを入手し文化的・経済的に成熟していく。

これら東北地方の有力な勢力と擦文文化集団により、北海道日本海沿岸域から青森県津軽地方・日本海沿岸域などに至る「日本海交易ルート」はもとより、北海道太平洋沿岸域から青森県外浜に至る「太平洋交易ル―

ト」、そして外浜から奥六郡をへて陸奥国府・「都」へと通ずる内陸交易ルートが整備されていくものと考えられる。

(6) 研究成果の位置づけ

本研究の成果は、日本列島はもとより北東アジア地域(サハリン、千島を含む)における交易ルートや物流経済の研究を進展させるものである。さらに、後の中・近世アイヌ文化における北方交易の研究に新たな視点をあたえるものである。

(7) 展望

この研究を進めるなか、8 世紀ころの北海道では、東北地方北部土師器文化との物流・交易が活発化するとともに、墓制・葬送に関わる文化、土器文化などが大きく変化する文化的な現象がみられた(成果論文①・③)。

これまで、北海道と東北地方の文化接触や交流、物流・交易などの研究は、交易品となる「モノ」の間接的な移動を中心に進められてきたものであり、その基層となる直接的な「文化集団の移動」にともなう文化接触や文化変容などの研究は未着手の課題である。

すなわち、東北地方北部から北海道への文化集団の移動、さらには古代北海道の文化的、社会構造的な変化を明らかにすることが新たな研究課題として提起されてきた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①鈴木琢也，2012；北海道における 3～9 世紀の土壙墓と末期古墳．北方島文化研究，第 10 号,pp.1-40（査読あり）
②右代啓視・鈴木琢也ほか，2012;北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり（Ⅱ）．北海道開拓記念館研究紀要，第 40 号，pp.143-154.（査読なし）
③鈴木琢也，2011；北海道における 7～9 世紀の土器の特性と器種組成様式．北海道開拓記念館研究紀要，第 39 号，pp.13-36.（査読なし）
④右代啓視・鈴木琢也ほか，2011;北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくり（Ⅰ）．北海道開拓記念館研究紀要，第 39 号，pp.99-110.（査読なし）
⑤右代啓視・鈴木琢也ほか，2010；国後島における先史文化とその資源利用．北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史－北方文化共同研究報告－，北海道開拓記念館，pp.125-140.（査読なし）
⑥鈴木琢也ほか，2010；新冠町明和チャシ・万世チャシの地形測量調査報告．北海道開拓記念館調査報告，第 49 号，pp.1-14.（査読なし）
⑦鈴木琢也，2009；擦文文化期の物流．擦文文化における地域間交渉・交易，北海道考古学会，pp.41-50.（査読なし）
⑧鈴木琢也ほか，2009；根室市別当賀川口 1 号チャシ・別当賀川口 6 竪穴群の地形測量調査報告．北海道開拓記念館調査報告，第 48 号，pp.23-38.（査読なし）

〔学会発表〕（計３件）

①鈴木琢也；北海道における 7～9 世紀の土器の特性と器種組成様式．北方島文化研究会第 39 回研究会，2011 年 9 月 17 日，北海道厚沢部町，厚沢部町図書館
②鈴木琢也；別当賀川口 1 号チャシ・別当賀川口 6 竪穴群．北方島文化研究会第 33 回研究会，2009 年 11 月 28 日，北海道釧路市，釧路市立博物館
③鈴木琢也；擦文文化期の物流．北海道考古学会研究大会，2009 年 5 月 9 日，北海道札幌市，北海道大学

〔図書〕（計２件）

①鈴木琢也，2011；北日本における古代末期の交易ルート-10～12 世紀を中心として-．古代中世の蝦夷世界，東北学院大学東北文化研究所編，榎森進・熊谷公男監修，高志書院，pp.201-226.（共著）
②鈴木琢也，2010；古代北海道と東北地方の物流．北方世界の考古学，すいれん舎，pp.101-118.（共著）

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　琢也(SUZUKI　TAKUYA)
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：40342729